

2006の集いから



2007 関東支部 同窓の集い ご案内

同窓の皆さま、臥牛山の桜の若葉は緑を深めてい... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

会 長 本間 勝治
実行委員長 志田 裕
新制二十回 実行委員一同

新潟県立村上高等学校同窓会関東支部
お高
題字 宮 絢子

2007.5.15 第18号
発行人 本間勝治
編集人 大滝修
事務局 神奈川県川崎市 麻生区向原3-5-5
☎ 044(953)8368

とき
平成十九年六月十六日(土)
受付開始 正午より午後一時開会
ところ
スクワール麹町
千代田区麹町六-六
電話〇三(三三三三)八七三九
JR(中央線・総武線)
四谷駅前(麹町口)
地下鉄(丸の内線・南北線)
四谷駅
四谷駅
四谷駅

同期会だより

城ヶ島 村上の銘酒で乾杯
三面会で交歓
小田 正一(新制三回卒)

「明治は遠くなりけり」と言われて... 久しいが、昭和の一ケタも、昔の古い匂... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

加は十五名(うち同伴一組)になり、少々... 淋しい結果でした。当日は、三崎港水揚... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

翌日は、観光船で油壺まで、相模湾を... 周遊し、北原白秋「城ヶ島の雨」の詩に... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

心癒してくれました。私達同期のもう... 一つの思い出は、旧制中学入学の半年は... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

軍人勲章による教授の授業を受けたこと... で、軍国主義教育の最後の学徒であるこ... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

とです。戦闘帽に星の徽章をつけて被り、... ゲートルを巻いて、軍靴を履き、校門で... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

敬礼して入門する規律でした。終戦の八... 月十五日に真夏の暑い校庭で、玉音放送... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

を聞いたことは、衝撃的で、今もって、... 脳裏に鮮明に残っており、忘れることが... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

す。関東支部会員の中にも、多くの教え... 子達がいると思いますが、安富先生の、... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...



臥牛会ゴルフ愛好会だより

平成十八年度の開催と結果

第三十七回 千葉真名C・真名コース
開催日 平成十八年四月二十日 風雨

ネットハンデ

優勝 近 五郎(旧46回卒) 75 20
準優勝 渡辺 正新(14回卒) 76 14

第三位 吉岡 襄介(新8回卒) 77 17
ベストクロス 上野陽之助(新13回卒) 89

・前泊希望者もあり初めての開催コース... と賞品も豪華に行われたが、スタートか... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

ら風雨が激しくなり、大変な大会に成り... ました。女性会員も七名出場。メンバー... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

の篠木幸雄(新五回卒)さんお世話様で... した。優勝の近五郎(旧四十六回卒)氏... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

の頑張りには敬意を表します。
第三十八回 東京・八王子 武蔵C
開催日 平成十八年十月二十四日 風雨

優勝 鈴木 真新(9回卒) 81
準優勝 泉原 富夫(新6回卒) 82

第三位 前田 洋(新13回卒) 86
ベストクロス 山口 喜雄(新12回卒) 94

・前回の三十七回にも増して早朝から雨... 風共強く、キャンセルが続出し、休止ま... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

で追い込まれましたが、集合者の熱意で... 決行。メンバーの平山進(新十二回卒)... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

さんお疲れ様でした。
ゴルフ愛好会・臥牛会では、スコアに拘らず一... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

日楽しくラウンド出来るよう企画し、皆様... 〇七年「同窓の集い」のご案内を差し上げる頃とな...

をお待ちしております。是非、お集まり下さい。
(連絡先) 鈴木亮 047-444-5183



# あの日 あのころ いましぼん



## フランスに特有な超エリート教育制度 — グランゼコールについて

菊地 武(新制一回卒)

私はこの程、フランスではもとより国際的にも名高いHEC(アシユセ)とESSSEC(エセック)の両経営大学院で客員教授として招聘され、優れた日本の経営に「マーケティング」をテーマに講義する機会に恵まれた。なお名門HECで講義した日本の大学教授は、私が初めてとの由であった。この機会に日本ではあまり知られていないフランスに特有なグランゼコールにつき、私の得られた貴重な体験を紹介して皆さんの参考に供したい。

グランゼコールは、フランスにおける独特な高等教育機関で、政治、経済、行政、科学技術、軍事、教育、芸術等の分野におけるエリート教育に徹している。従って、選別試験が非常に厳しく、一般の大学では、受験者がバカロレア(全国共通一次試験が大学入学資格試験)に合格すれば原則的には、登録した大学に無試験で入学出来るのに対して、グランゼコールの場合は、プリバラといわれる二年間の入学準備課程を修了しなければならぬ。更にこのプリバラを終了してからグランゼコールに入学するには十倍から十五倍の競争率を突破する必要がある。一日十五時間の受験勉強をしないと合格しないといわれている。高校の最終学年の成績とプリバラからグランゼコールへの受験試験。優に十数倍の競争率である。日本におけるお試験地獄どころの話ではない。



フランスのグランゼコールの学生は、日本の一流大学への入試以上の厳しい幾多の試験を突破してきただけあって、知識に限って言えば大変なものである。しかし、かくして最低年齢は、二十歳。確かにエリートではある。入試に論文作成と公開の討論が特に重視されていることから、学生の「書く、話す能力」は優れている。将来を保証された誇り高きエリート達のコミュニケーション能力は、日本の学生とは比較にならない程に群を抜いている。これは私自身が、授業を通じて得た実感である。

グランゼコールの歴史は古く、中でも歴代の大統領を輩出しているポリテックは、遙かナポレオン時代に創立されている。また私が講義したHECは、一八六六年に創立されている。驚きである。

一方、それぞれの分野で先輩達が長年の間に培ってきた学閥の影響について触れてみたい。

グランゼコールは、それぞれの分野で、長い年月をかけて強固な学閥を築き上げた。例えば、フランスの財界における指導的な地位の人々は、例外なく私が今回講義したHECのOBである。財界における学閥としての団結と影響力は、絶大なものがあり、日本における東大法学部・経済学部と匹敵、あるいはそれを更に上回っていると言われている。例えば私はパリに滞在中、HECOBの財界人の会合に学長のお供をして出席したことがあるが、会場はパリでも最高で、天皇も宿泊されたホテルChateau(クリヨン)。食事は、近くのこれまたパリでは最高級のTaillevent(タイユパン。オーナーはHECのOB)であった。財界におけるHECの力を肌で感じることができた。最後に、日本の会社が社員の海外研修に際し、従来アメリカのMBAに偏り過ぎた傾向に反省がみられ、僅か乍ら軌道修正するようになった点を指摘したい。EC統合の動向を睨んで、日本の会社では、最近ヨーロッパの有力なMBAにも社員を研修のために派遣するようになった。イギリス、フランス、スイスへ可成りの数の日本の社員が研修に派遣されている。現に、HECとESSSECで私の授業に日本人の社員学生が可成りの数、熱心に受講していた。今や正に言われて久しいが、ECと国際化時代である。

「フラット化する世界」トーマス・フリードマン著、伏見威蕃訳、日本経済新聞社刊を出来れば原書で参照されたい。元東京理科大学教授(経営学専攻)

## 遊びとハングリーそして今

泉原 富子(新制六回卒)



六十数年前の村上は、道路は砂利道、自動車もめったに通らず、馬車や牛車が行き来していた。

子どもたちは、大勢道路に集まって、缶けりや鬼ごっこ、陣取りなどをして遊んでいた。これは羽黒口の入り口(土族の町)と向かい側の羽黒町(町人の町)の子どもの遊びだったかも知れないが、物も無い、食べるのも大変な時代であったが、子どもたちは、本当によく遊んだ。

春は、近くの山に花摘みに行き、お城山へは、裏の崖からよじ登り、急な坂は近くの杉の葉や小枝を折って尻に敷き、踵をブレーキがわりにして下りていた。そして、カマドの焚き付けにする枯れた杉の葉や小枝を拾って縄で束にし、二宮金次郎のように背負って帰ったものだ。摘んで来た花や欠けた茶碗、皿など出して、ままごと遊びをした。

夏は、近所の上級生と四五人で、にぎり飯を持ち、山居前の田んぼの中の曲がりくねった道を一時間位歩いて瀬波海岸へ泳ぎに行った。顔も背中も真っ赤に焼けて、夕焼けを背に帰った。

秋は、木の葉採りに行ったり、イナゴ捕りに行ったりした。また、イナゴのぎざぎざな足や羽根を取る手伝いもした。甘辛く煮たイナゴは、香ばしくおいしかった。いまは、農薬使用のせい、イナゴも捕れなくなり、市販でも佃煮は、あまり見かけない。冬は、近くの山でスキー。直滑降のみで、止まる時は尻餅が横転。父が手作りの箱ソリや竹下駄で坂道を滑って遊んだ。

人形遊びもよくやった。四、五年生の頃、布や綿を持ち出してきて、顔、胸、手、足を縫い、服も自分で縫った。目や鼻を描くのに苦労をし、なかなか満足する人形は出来なかった。

お手伝いと言えば、買い出し。六年生の頃、米は配給制で、闇米はご法度の時代。お金があっても農家は、米を売ってくれず、町の人は、大事な着物と交換していた。それでもなかなか手に入れるのは難しかった。やっと手に入れて、背負って帰ってきた。羽黒口の入り口で待ち構えていた巡査に没収される。家の窓から何度も見た。私は、26歳の男用自転車の後ろに籠を乗せ、二、三里離れた母の知り合いの農家へよく米を取りに行かされた。当時私は、ウサギを飼っていたので、ウサギの草を取って米の上のせて帰った。「ただいま」と家に入り、窓から向かい側の道路に立っている巡査を見ながら、胸をなで下ろした。

当時は、電力不足が、しょっちゅう停電をしていた。セーター編みに熱中していた私は、停電になっても暗闇の中で編み針を動かしていた。(これが後に、盲学校で子どもたちに編み物を教える事に役立つとは思ってもよらなかった)。

学校から帰るとすぐ外に飛び出して遊ぶのが日課になっていたが、中学入学と同時にピタリとやめてしまった。中学生時代には、山遊びも、スキーも、

海水浴も近所の友だちと行った記憶がない。後二か月(平成十九年五月)で七十二歳になるが、重度の障害者施設(現在の職場)で働いたり、ゴルフをしたり出来るのも丈夫な体に産んでくれた親や、子どもの頃のたくさんのお遊び、高校から定年近くまでバレーボールをしていたこと、そして学生時代に援助をしてくれた兄たちのお陰と感謝している。

## 幼なじみの同級生を訪ねて

市川 房子(新制十七回卒)



私は、梅の花が大好きです。今はもうその花も散って青葉で一杯です。私もこの世に生を受けはやく十年、主人を亡くして十一年が経ちます。その間、無我夢中で人生を駆け抜けて来た気がします。梅林で有名な、水戸の借楽園を訪ねたのは、二月下旬、とても暖かい日でした。梅の花も満開で、大勢の見物客で、賑わっていました。

今回は二度目の見物です。三年前、水戸市姫子に住む同級生の大信さんからお誘いを受け、借楽園の梅を見に行ったのが最初です。その頃の私は、三人の子供の事で身も心も疲れ果てていました。そんなある日、彼女から電話があり、「今度、私の家へ遊びに来て。泊まって行きなよ!」と言う話になりました。借楽園の梅も見たい、三十年ぶりに、彼女にも会える、楽しみもふくらみました。夕方、仕事を終えると、すぐに、高速バスで出かけました。ご主人も、暖かく出向かえて下さいました。幼なじみと言う事で、親戚同然のおもてなしを頂き、フワフワした布団の中でゆっくりやすませてもらいました。ご夫婦の心遣いに、心身の疲れも癒されました。

あの日のは、今でもはつきりと覚えてます。今年も、三年ぶりに日帰りで行って来ました。以前より元気になった私の事や同級生の事などで、話の尽きない再会でした。中でも彼女は、どうして私が、梅の花が大好きなのか、不思議そうでした。梅は、寒中を耐え、早春、芳しい香りを添えながら咲き続ける花です。また、私にとつて、梅は、心に春を告げる大切な花となっています。梅の花言葉は、「忠実・独立」ですが、私は勝手に、「忍耐・希望」と置き換えて、座右の銘としています。

どんなに辛い事があっても、それを乗り越えれば、必ず花咲く時が来る!と心に決め、毎年、梅の花の咲く頃を、励みに、生きています。幼なじみの彼女とは、お互いに、実家が近かったので、良く遊び、通学時も、良く迎えに来てくれました。しかし、小学校一年生の時、私は、父を亡くして、家事手伝いに追われ、「先に行つて、て!」

と言つては、一緒に通学出来ないことも、しばしばありました。そんな話などで、庭園を回りながら、幼少の思い出話に花が咲きました。園内でお昼を頂くと、少し疲れたので、彼女の家に帰りました。暖かいコタツの中で二人して、テレビを見ながらウトウトと眠ってしまいました。気が付くと、もう夕方になっていて、子供にかえった気分です、お互いに笑ってしまいました。彼女は、小さい時から、オシャレで、明るく、社交的、商売上手な性格の人。私は、まるで正反対。でも良く馬が合つたのです。

そんな彼女とは、生涯、付き合っ行って行けるような、運命的なものを感じています。そして、お互いに、歳を重ねる度に、美しく老いて行く、シニアライフをエンジョイして行きたいと願っています。

数年経ったら、また水戸の偕楽園で、梅の花を愛でながら、幼なじみの同級生と語りあう日を、今から楽しみにしています。

### 無言の教え

八藤後 稔(新制二十一回卒)



僕は、「村高」へ昭和四十二年に入学し、昭和四十五年卒業しました。自宅は二之町にあつて、校舎(当時は三之町)までは十分もあれば行きましたが、それでいて遅刻もしばしばありました。

近いかつと言つていつも八時ぎりぎりまで寝ている癖がつき、テレビの時刻を見ながらあわてて登校したものです。

通学路は、三之町の川村精肉店の横を右折して簡易裁判所の三叉路を左折でした。しかし、遅刻しうになると、川村精肉店の前の道路を横断し、学校の石垣を登り、金網のフェンスを乗り越えて登校してました。石垣を登り、フェンスを乗り越えるのが、毎回となる時つくなりです。そこで、今度は、グラウンドの藤基神社側の入口の戸が開け放しになっているに気づき、そこから入れれば石垣やフェンスを乗り越えなくてもいいと考えました。

完全に遅刻と分かつた日は、決まって藤基神社側の入口に向かいました。

この戸は、いつも開いているし、その時間帯は人気もない。後はグラウンドを横切つて知らぬ顔をして教室に入れば担任の先生の点呼に間に合う筈だ。完全犯罪は成功だとおもいました。

ところが、ある日の事です。誰にも咎められずグラウンドを突き抜け体育館の側までやってきたその時、天から声が掛かってきました。

「ちよつと、その板きれを取つて」

不意を突かれた僕は、おどおどしながら声のする方向を見上げると、体育館の二階の窓から体育の女

先生が声をかけてきたのです。面食らつた僕は、先生が何を言っているのかは分からず、怪訝な表情を

していると、また声が掛かってきました。

「そこ、そこに板きれがあるでしょう」と、指を差しています。指し示した方向を見ると、地べたに幅7、8メートル、長さ30メートル程の二スで塗られた「板きれ」が落ちていました。僕は、「これ」と指差し、二階の先生の顔を見ました。先生は「なすきました。私はその「板きれ」を拾つと説教されるのではないかと思ひ、体育館に向う足取りが重く感じられました。体育館の階段を上り、恐る恐る教官室をノックしました。てっきり叱られると覚悟していましたが、先生は、「板きれ」を受け取ると何も言わずにドアを閉めてしまいました。

先生は、グラウンドに入つてくる僕をずっと観察して、「板きれ」を拾わせる事で、「そこは通学路ではないよ。遅刻はいけないよ」と教えたかったのではないかと思ひ、私は恥ずかしさで体中が火照りました。しかしそれ以来、藤基神社側から入ることだけは止めたものの、早起きをしたというわけもなく、その後も遅刻は相変わらず続いていました。

卒業後、首都圏に生活して三十余年になりました。

最近、パーティーなどへ出席する機会も多いですが、今では、定刻十分前には会場へ駆けつけるよう心掛けています。これも「村高」時代の女先生の、無言の教えの賜物と感謝しています。

### 「今も聞こえてくるエール」

小田 徹(新制三十回卒)



高校合格後、まだ入学も入部もしていない三月中旬からが、私の高校生活のスタートでした。

野球部への入部を決意していた私は、早いうちから硬球に慣れようという狙いで入学も入部もしていないこの時期に参加を申し込んだのです。ちょうど、中越高校と合同練習をしていて、中学時代の練習とははるかに違う緊張感とレベルの高さに背中に稲妻が走る思いだったのを憶えています。私にとって、野球部での三年間は、これまでの人生でもいちばん輝き、人としての全ての基礎を形成した濃厚な原点となつています。

今でも、夏休みやお正月には村上に戻り、当時の三年生の五人と懐かしい三年間を振り返りますが、いつも試合の詳細をまるで実況中継のように話して盛り上がっています。予選最後の試合経過、ヒットした球種、相手投手の表情や言葉まで憶えています。私は彼らの記憶力に驚かされます。しかし、もっと驚くのは、私がほとんど三年間のどの試合の記憶もないことです。彼らの盛り上がる話についていけず、

うなずくだけなのです。何故かはわかりません。私にとっては、試合で、戦術、かけひき、勝ち負け、ゲーム性、緊張感、相手との心理戦、その読み、チームの連帯感、感動などを感じていたはずなのに、練習の一日一日の記憶の方がより鮮明なのです。そして、練習によって得たものの方が、圧倒的に多く、大切な宝です。

次の二つは特に大きな教訓です。

まず、練習の量と質は上達に比例するということ。練習は嘘をつかない、とか、練習は裏切らない、などの言葉をよく耳にします。私は、おそらく間違いない技術的にもパワー的にもレギュラークラスではありませんでした。練習で楽しいと思つたことも一日たりともないです。きつくて、毎日が肉体と精神の限界の毎日でした。特に、雨が降つたときの瀬波温泉の松林内コースのランニング、羽根神社の階段上りなどは基礎体力をつけるためのメニューだったのかもしれない。しかし、本当に嫌で何度も挫折しそうになりましたが、着実に基礎体力も精神力までも着いてきたのだと思ひます。そして、上達するたびに小さな達成感を自覚できること、そのプロセスとそこで味わう達成感、快感がきつい練習にも耐えられたのだとも思ひます。練習の中で反復して教えられる技術的な課題を自覚して修正していくプロセスで確実に上達するという事実は、後の社会人として仕事でも通じる教訓となつています。

次に、チームワーク。

入部した当初も含めて一年生は十人以上いましたが、最終的に三年の夏の大会予選の最後まで一緒だったのは五人でした。ある日、OBからは、村高史上最低の三年生、とまで酷評されたこともあります。当然、この五人ではチームは組めません。下級生の力も絶対に必要、しかも、下級生には体力的にもセンスもかなり私たち五人よりも上のメンバーが多く、助けられました。一人ではゲームは成り立たない、という問題ではなく、一人一人の力には、能力の限界もあり、その能力を100%発揮できない場合もあります。しかし、逆に、能力以上の不思議なパワーが発揮されることがあることも事実です。なぜなら、前述のOBからは、史上最低の三年生と酷評された後、史上最低のチームと付け足されたのですが、夏の予選では地区予選でも、新発田農業と互角の戦いが出来ましたし、そのOBの口からそれらの言葉をその後は封じ込めました。一人一人の気持ちひとつの方向に向き、高いモチベーションによってポテンシャルも引き出したとき、100%以上のチーム力に変化してしまうことも学びました。マネージャーや、ベンチの部員、スタンドにいる部員、それぞれがバラバラなのにひとつの生き物のようにまとまる機能性溢れるチーム。

ほかに、たくさん得たものがあります。そして、ときどき仕事やプライベートでつまずくとき、あの三年間の厳しさや突き当たる壁をいつも真正面から逃げずに越えて行けた自分のポテンシャルを思えば、目の前の壁は必ず越えられるはず、こんなところでもつまずいて何やってるんだというエールが聞こえてきそうな錯覚を覚えるのです。

### 幼少期と学生時代の思い出

稲葉 和孝(新制五十一回卒)



私の思い出といえば、幼少時代の川遊びと、学生時代の部活だ。私の幼少時代の一番の思い出は、川遊びだ。父や祖父に連れられて行った三面川や荒川。母が握つてくれたおむすび。おむすびと一緒に食べる鮭の切り身。水鏡から川底を覗いて捕つた鮎。ただ私は鮎を捕るのが下手くそで、兄が捕つているのを邪魔していた。邪魔をするのも疲れて川辺で寝ていると、父と祖父が鮎釣りの休憩で戻ってくる。釣つてきた鮎をその場で塩焼きにしたこともあった。うまかつた。

母は特に祖父から私たち兄弟を川に連れて行っているかど口うるさく言われていたらしい。確かに川遊びができて私たち兄弟は幸せだったが、その裏で母の苦労は増えていたようだ。お母さんありがとう。

家に帰れば、鮎を素揚げや味噌汁に入れたりして食べ、祖父や父の釣つた鮎は塩焼きで食べる。本当においしかった。今は東京で働いているが、ありがたいことに年に二回の長期休暇をいただけているので盆と正月には帰省するようにしている。特に夏は時間があれば川に行くようにしている。鮎釣り、鰻捕り、川や山、空を観る。あの頃から何も変わらない。ただ、川辺で飲む酒はあの頃にはなかった。子供だったから。川辺で酒を飲むようになってからあの頃の父や祖父はこんなに気分がいいものだったのかと感じている。

私の学生時代の一番の思い出は部活だ。中学からサッカーを始めた。当時はリーグ発足と時期が重なり同年の部員だけでも四十人はいたと思う。それでも入部当初に毎日15分ぐらい走らされて辞めていく部員も続出した。でも辞めなかつた。安達健、片野靖之、榎本尚志、渡辺敏也たちと朝から自主練習をし、部活の後や土曜、日曜も陽が落ちてもボールを追いかけた。冬は雪が積もつてもボールが凍つても外で練習した。夢中だった。だからメンバーに選ばれたときは、嬉しかった。あの喜びは今でも忘れられない。

高校でもサッカーを続け、部長に選ばれ、部を盛り上げていくために悩んだが、ここでも素晴らしい



が校長職務取扱として着任、学校は県の管理下に入る事となった。二十九日、五年生は一入らず呼び出され取り調べを受けた。その結果、六名が放校、七五名は三日間の停学、七名は関係せず処分なし、となった。三〇日、四年生の登校拒否は続き、翌十月一日もそれは続いた。十月二日(土)になり、四年生の父兄が生徒の説得に成功した。五年生は柔道場に集り、職員の前で暴行事件を謝罪、翌十月四日(月)より登校して授業を受ける事となった。七月以来四力月に亘った騒動は、漸く解決をみる事になったのである。十一時、父兄や職員出席のもと、五年生を集め、父兄、生徒双方より謝罪があり、五年生の血判状は焼却された。しかし、まだ四年生の処分は決まっていなかった。十月二〇日にいたり、四年生の処分を決める職員会議が開かれ、無期停学一名、十五日間停学五名、三日間二名、他は三日間自宅謹慎というものであった。厳しい処分でこれ以上長引かせてはいけないという思惑があったものと推測される。

十月三〇日、計画的集団暴力事件(村上警察)であることからの刑事訴追が予想されたが、新発田検事局の捜査の結果は、皆未成年であり、かつ子供らしい単純さもあるという理由で不起訴となった。十二月二十五日午後一時二五分、大正天皇が崩御、大正時代も終わりを告げる。昭和元年は僅か六日間、こうして教育界を震撼させた村中事件も、大正の終えんと共に終りを告げる事になる。

総じて村上中学に限らず、大正時代の特徴のひとつは、大正デモクラシーという時代の潮流の中で新潟県下でも学校騒動が多発した時代であった。大正六年から十五年の十年間に新潟、長岡、村上新発田、三条、巻、能生水産、新潟商業、高田女子高等同盟休校事件が集中して発生している。

こうした流れの中でこの事件を見てみると、お祭に休ませて欲しいという単純な要求から出発しながら、職員間の派閥紛争に巻き込まれ、同窓会の分裂の中で翻弄され、集団暴行事件にまで発展した不幸な事件であったが、三年生以下は巻き込まれないという方針を五、四年生が終始貫いたことは、せめてもの救いというべきであつたらうか。

広島県師範学校教諭若下雄三が村上中学校長として着任したのは、翌昭和二年一月八日のことであつた。



(本稿は、元本校教諭八木三男氏の著作「村上中学教育小史」を基に構成、生徒の敬称は略させていた。益田氏の死去により、後編は大滝が執筆いたしました。)

## 知的障害者更生施設『白州いずみの家』理事長をつとめる



齋藤 實さん

(昭和三十年 新制七回卒)

記録的な暖かさが続く一月末。東京・新宿。柔らかな日差しがふりそそぐビルの一隅の喫茶店。生き様について縦横に語ってくれた齋藤實さんの第一印象は理想に燃えた熱血先生。さぞ若い頃は熱い思いをぶつけてきたのだろう。教育とは知識の伝授ではなく情熱ではないか、そんな思いが伝わってくる。

昭和十一年生まれ。村上・久保多町出身。長い間教職にあつて人材育成にあたる一方、社会福祉でも真正面に向き合い取り組んでいる実践家でもある。人は時代という荷物を背負いながら、出会いによってそれぞれの人生を織り成してゆく。そんな人生模様が見えてくる。

山梨県北巨摩郡(現北杜市)白州町。甲斐駒ヶ岳の麓、名水の里として知られる町の一角に、白州いずみの家がある。齋藤さんが理事長を務める社会福祉法人いずみせが、都外施設として昭和六十二年(一九八七)に設立した施設である。

一八〇〇坪余の敷地に男子棟、女子棟、更にモンメゾン(自立生活棟)を中心に交流ホール、作業所、食堂が配置され、三〇名ほどの知的障害者が職員の見守りのもと自立の道をめざして歩んでいる。二〇年を迎えた施設は今、拡張工事に入り、完成すると念願の全個室化が実現する。もちつき大会や親子旅行、アフリカンドラムでの音楽療法、広報誌「ちやいむ」の発行、作業所で作った織物、ジャム、バターナイフ等木工製品等の販売等々、人利用者、職員、家族が一体となって、地域との交流を計りつつ運営されている。

齋藤さんの社会福祉との出会いは、長男が精神発達遅滞児として、恵まれて生を受けたことに始まる。昭和三十五年、中大卒業後、都内の私学・攻玉社会学園高校で社会科と英語科教師として国際的視野を持った人材育成に情熱を傾けていた齋藤さんにとって手探りを余儀なくされる未知の分野だった。

障害者福祉は、人間の命の尊厳がその時代にどれだけ大事にされているかのバロメーターとされる。



明治以来、欧米列強に追い付く富国強兵を第一とし、戦後も産業経済発展が最優先課題とされ、障害者は偏見や差別に無関心も加わって発展の枠外におかれてきた。多くは施設にも入れず、在宅のまま放置の状況におかれていた。国が重い腰をあげ、障害者基本法が制定されたのは昭和四十五年(一九七〇)のことである。

東京・立川で、同じ悩みを持つ一四人が集まり、障害者更生施設建設を目指す「いずみせ」を発足の根運動のスタートを切ったのは昭和五十三年(一九七八)のことだった。

山梨県白州の地に厚生大臣認可の社会福祉法人施設として開所にこぎつけるまで九年の歳月を要した。「当事者の自助努力なしには進展しない」との信念のもとにあらゆる情報と人脈を駆使しながらも手探りのいばらの道だった。福祉誌に掲載された齋藤さんの「これからの地域福祉の在り方」には、①基本的な人権の尊重②治療教育③家庭化④地域へのオープン化との四つの基本理念が述べられ、簡潔な表現ながらも社会の現状と闘いながら模索し、切り拓いてきた苦闘の姿が伺われる。

「福祉活動は永遠に未完成。障害者を一人の人間として認め、働く中で育ててゆく周囲の理解と寛容な精神を育てて欲しい」とことあることに訴えてきた齋藤さんの思いは、なお今日の切実な願いでもある。昨年十月スタートした障害者自立支援法は、受益者の一割負担制を導入、負担増でサービスが受けられなくなる等の事態が起こっている。財政難の名のもとに受益者負担を押し付けるこうした在り方は、福祉の現場に新たな困難と格差をもたらすものとして批判の声が挙がっている。

今となつては死語となつた言葉だが、「苦学」について語るとき、齋藤さんの弁舌は一層熱を帯びた。終戦時九歳。「防空壕掘りもやった。B二九の編隊の空飛ぶ様子も、瀬波沖にアメリカの輸送船がずらりと並んだ光景もこの目で見た。鬼畜米英の黒人米兵に悪印象はなかった」という。終戦を挟んだこの国のこうした劇的な変化のあり様をじかに自分の目で

見た人達も今や少数となった。村高卒業後、法律家を目指し中大法学部へ入学。日本はまだ貧しい時代だった。「親からの仕送りは一切受けず、学費は勿論、生活費も全て自分で稼いだ。ある時、アメリカ人宣教師夫妻に知己を得て居候生活に成功。子供のお守り、おしめ替えまでした。こともあつたという。経済的に助かったことに加え英語を学ぶおつもりまで付いた。後に持論となる「自立した生き方と国際的に通用する人間づくり」は、こうした体験の中から生まれた。

卒業時に法律家を断念、教師の道を進む。「小学校四丁六年担任の女教師の感化が大きかった」と齋藤さんは述懐している。先生から伝わる新しい時代の息吹と情熱は、一人の少年の生き方をもう変えるほどの力を持っていた。

最初の勤務先の攻玉社会学園高校では、新米教師ながら六年制の少数英才教育と名づけた中・高一貫教育を提案。全国に波及する先駆的役割を果たした。また、国際的に通用する人づくりを唱え、昭和三十一年(一九六四)日本私立中学高校連合会第一回力ナダ・アメリカへ教育視察団に借金をして参加、帰路のハワイでは新潟県人会からの地震の救援物資を預り、被災地へ届ける橋渡しをしたこともあった。

こうして、一九六一年以来、世界教育連盟の役員として東京、ソウル、オーストラリア、アメリカ等の国際会議に参加するなど、青少年の国際交流やユネスコ・JACAの研修視察旅行でヨーロッパ・アジアの数ヶ国を歴訪した。中でも忘れられない思い出は、一九六七年、オーストラリアでの世界連邦国際会議に日本代表団員として参加した時のこと、湯川博士の紹介でパチカンでパウロ六世に謁見する栄誉を得た。平成十年(一九九七)には日本教育研究連合会より教育功労賞、二〇〇五年には世界教育連盟(WEF)から小原賞を受賞している。

「歳月を重ねただけでは人は老いはいはしない。理想を失う時にのみ人は老いる・・・」サミエル・ウルマンが語りかける「青春」は、今もなお齋藤さんの心の糧だ。平成十四年、攻玉社から都立高校を経た、四二年間の教職を去る。今は、理事長として厚生施設の経営にあたる他、豊富な経験を生かし、立川市在住外国人の日本語教室や小学校での絵本の読み聞かせなど、ボランティア活動に汗を流す。求められれば講演や執筆活動も行っている。

著作ほか、時事通信社「時事解説」のコラム、玄武社の人物評論「カレルギー伯と青山光子」など執筆多数。著作(共著)には「これが正しい教科書だ」(山手書房)、「今、中学高校教師に望むもの」(栄光教育文化研究所)等がある。(大滝修 新制十三回卒)

村高関東支部役員一覧

名誉会長	氏名	卒業回数
顧問	小川景士	旧40回
会長	長郷邦孝	旧44回
	渡辺孝勝	新5回
	本勝	新9回
副会長	木藤克子	新8回
	鈴木亮	新9回
	小野安雄	新10回
	佐藤勝	新14回
	尾崎茂	新15回
事務局長	長谷川康夫	新10回
会計監査	川村正進	新4回
	平山	新12回
幹事	齋藤喜英	旧35回
	藤平金一	旧36回
	大鈴木喜利	旧39回
	富樫昌五	旧40回
	岩間五郎	旧42回
	近藤三泰	旧46回
	山本昭一	旧46回
	川上孝二	新1回
	小田正	新2回
	村川起	新3回
	湯浅慶子	新4回
	中野素子	新5回
	野中千枝	新6回
	荒木廣雄	新6回
	本間實	新7回
	齋藤貞雄	新7回
	市岡菊郎	新8回
	中野悟洋	新8回
	小関根三子	新8回
	小林喜重	新10回
	稲葉修	新11回
	大滝繁	新13回
	菅井真人	新13回
	稲葉真樹	新14回
	川村宏平	新16回
	山本芳行	新17回
	秋山陽三	新19回
	佐藤栄二	新20回
	高橋栄二	新20回
	鳥屋賢吉	新23回
	永井英之	新26回
	中村成章	新29回
	相馬安夫	新30回
	丹本美恵子	新31回
	篠崎泉	新34回
	前田格	新36回

(平成19年3月20日現在)

維持会費納入のご協力をお願いします

同窓会の活動運営を支える唯一の財源として、皆様年間1口(2千円)以上の維持会費をお願いしています。なにとぞ添付振込用紙にてご協力をお願いいたします。昨年度は多くの方々からご協力を賜り、ありがとうございました。本年度もよろしくお願い申し上げます。

「村高」同窓会関東支部HP  
<http://www.murakou.com/~kanto/>

「けやきぶん」の春

鈴木 富夫(新制十回卒)



朝日村上中島の「けやきぶん」は、例年と違って雪のない越年。春が来た。庭の榎の樹々(八本)も芽吹いている。本を読む塾を朝日村で(しかも有料で)スタートして間もなく一年になる。いま塾生五十人余。よくモツたなあ、塾生の皆さんも私も。

平成十六年春、妻(晟子)の死とキャッシュカードスキミング事件(被害額三千二百万円、当時日本一)が、ほぼ同時に、私に起きた。晟子の一周忌法要前に、事件も裁判も解決。私、ひとり、さて、どう生きるか。まさに、「日残りて昏るるに未だ遠し」(藤沢周平氏)ほどじやないが、たぶん「少し」はある。私に、何が出来るだろう。気障になるが、世の中へ恩返し、だね。不良、が真人間になりたい。残生を逆算してみる。様々、考えた。そして、本を読むこと、だなあ、出来れば仲間つくって。やるなら鄙・田舎がいい。最初から、そう考えていた。倅い朝日村には、前村長、故中山与志夫氏(六十四歳で逝った私の父、同年の友人でもあった)とおつきあいで、友人も多い。晟子の一周忌を終えた夏、上中島の土地(村高同窓生、板垣シンさんの)を購入。翌年、雪解けを待つて着工、六月完成した。塾の名は、敷地(三百坪)に、榎の大木が、あつたから。設計は詳しい女友だち二人。

第一回は、朝日村の隣、鶴岡舞台の「蝉しぐれ(藤沢周平著)」と、「国家の品格(藤原止彦著)」で始めた。いま十回目、「相剋の森(熊谷達也著)」、山北町が、舞台の話。課題の本は、すべて、私が決めている。「俳句と読書」のークラスを含めて、五組、一組、十人前後。一回、二時間である。感想文など一切不要、私は、例えば、「気に入った風景描写」を二、三行、そのまま書き写してもらっている。作家によって句読点の打ち方、凄く違うし、塾生みんなの感性も違う、それでいいのである。本を読むことは、(人(人生)それぞれだということを知ること。それが、大事なことです。嬉しいのは、皆んな率直、賑やかにモノいうこと。ときどき、私、からかわれている。朝日中心に、村上、山北、荒川、神林の人たち。一年後には、皆、村上のひとに。

平成18年度維持会費拠出者(順不同 敬称略)平成19年3月20日現在

旧制34回	井伊哲郎	5回	熊崎英二	8回	早坂文秀	11回	古川純一	15回	角替キヨ	18回	高橋繁夫	21回	難波光
39回	成田秀夫		横井山正		村藤克市		田齋藤		寺井小川		山村長		川上修
40回	田田直清		中井義隆		赤木隆三		齋藤正		小田保		河口富		中村さ
41回	小川清利		佐藤祐光		本板星		小本永		中尾中		菅井裕		工藤木
42回	富田周平		横山昭一		板垣野		山脇千		中尾中		増森下		鈴木藤
44回	長谷川和		早川孝		星野谷		平藤進		中尾中		磯渡部		斎藤茂
46回	岩間昭		野中千枝		板垣野		藤原義		中尾中		渡辺哲		八藤直
新制2回	寺井明夫		小泉裕		赤木隆三		山脇千		中尾中		磯渡部		安藤山
3回	渡辺謙		長谷川悦		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		村山十
4回	小野利喜		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		渡辺三
5回	中野昌典		荒木修		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		安藤山
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		中林和
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		小島和
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		山本邦
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		相馬章
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		小田徹
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		丹村安
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		斎藤正
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		本間美
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		廣田昭
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		石井健
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		伊藤明
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		中島博
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		峰田知
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		50回
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		51回
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		定制
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		5回
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		7回
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		11回
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		11回
	藤田正二		岩澤正		板垣野		藤原義		中尾中		磯渡部		13回